

古代・洛東江の畔

崔宣葉

……地図の上 コンパスぐるり 旅気分……

右の川柳は稚拙な自作の川柳である。下手ながら自分では気に入っている。私は地図を見ながら、その場所の風景や情景など、そして、出来事などをイメージするのが好きだ。今回、司馬遼太郎さんの、全43巻からなる『街道をゆく』2を読み始めた。気負わず、読めるところまで読んでみようと思っている。きっと時空を超えて、楽しい旅気分を味わえるはずである。作品は五十年前に書かれたものだ。

最初に手にしたのは「韓のくに紀行」だ。ちなみに、私は日本生まれの、今年七十七歳になった、在日コリアン二世の女性である。そんなこともあり、この本を一番先に手に取った。コリアンでありながら、実は、私は自国の歴史を正しく知らない。

本を読み下っていくと、不思議なおおらかさに包まれる。そして、一度もお会いしたこともないのに、司馬さんの骨太の朗読を聞いているような、そんな錯覚にとらわれる。大胆な仮説と緻密な調査に裏付けされた、作品の内容は魅力的だ。機知に富んだユーモラスな文章、そして、早急な断定を好まない、氏の柔軟な姿勢が心を和ませる。

目次、Ⅰ加羅の旅 Ⅱ新羅の旅 Ⅲ百済の旅の順を追って読み進む。先に進みながらも、なぜか、目次Ⅰ加羅の旅に、後ろ髪を引かれる。が、一応最後まで読み通す、272頁かななるさほど長くない作品だ。文面には私の好奇心をそそる文章や、言葉が沢山出てくる。そういう箇所にはチェックを入れる。後日、読み返して、自分なりの見解を深める。そうすることで、私が知らなかった自国の歴史を、旅するのを助けてくれるはずである。

一度目の通読の後、最初にチェックを入れた53ページを再び開く。

「日本人はアジア諸民族の雑種ですけれどもね、その血液の一部は古代金海から流れてきたと言えるかもしれませんよ」

「へえー」

この部分は、司馬さんが、旅行のガイドを務めるミセス・イムとの会話文である。大雑把に数えて、今から、二、三千年前のことという。まだ、日本とか朝鮮とかいう国名なかった頃の話だ。想像力が途方もなく豊かで、ロマンチスト向きの話である。司馬さんは日本人のルーツを探っている。当時、渡来人が頻繁に日本海を渡りやってきた。また、反

対に日本人も朝鮮に行った。その地が気に入ったら、互いに土着した者も多くいただろう。当然のように、混血をなす。歳月を経ることで、混血した人口は増えていったと想像する。海を隔てているとはいえ、両民族の間には国意識がないから、相手が外国人という意識はなかったかもしれない。彼らの間では、人種的な一体感を持っていたのではないかと、司馬氏は言う。その地が金海だ。

朝鮮半島は全体に花崗岩が多い。土地は岩盤の地質だ。雨があまり降らない。しばしば干ばつに見舞われる。地質的には農耕作に適していない。そこへいくと日本には梅雨がある。土壌も肥えており、農耕に適している。朝鮮の彼らは、冬になると対岸のような距離にある、日本にやってきた。冬の風は朝鮮から日本に向けて吹く。入り江に船を浮かべておけば、風が勝手に日本に連れて行ってくれるのである。釜山から対馬までの海上の距離は、わずか三十海里（約五十六キロメートル）だ。北九州や日本海沿岸地方にも、両民族は頻繁に行き来しただろう。その入り江が慶尚南道の金海にあるというのである。古代と現代の、両国を結ぶ洛東江の入り江。

では、金海は何処にあるのか。世界地図を広げると、ユーラシア大陸東端に突出した半島がある。ここが朝鮮半島である。巨大な大陸国家に挟まれて、朝鮮の歴史は常に脅威にさらされてきた。四千年以上の歴史を持つと言われている。国土の形が、ウサギが西に向かって跳ねる姿に似ている。そのウサギの背中に当たる部分に、半島を南北に貫く太白山脈が横たわっている。太白に端を發して流れる洛東江。洛東江は大邱市から釜山市へ、そして日本海へと注がれる。豊かな洛東江の河川は田畑を潤し、多くの人口を養ったことだろう。

ここで、話は四世紀から七世紀に鼎立した、三国時代に飛びたいと思う。北の高句麗、南の新羅、百濟。この三国は別に、新羅と百濟に挟まれた小さな国、賀洛国があった。洛東江はこの小国の東を流れる。賀洛国は他に、金官国、加羅国、伽耶国、任那国とも呼ばれた。今の韓国南部、慶尚道あたりの金海にその国はあった。四世紀半から六世紀半にかけて、たいへん栄えたという。この周辺には三国時代もそうだが、三韓時代の頃も、そこに住む民族は一種類ではなかったらしい。中国式に冠をつけた民族もいれば、つけない民族もいた。日本の上代人の服飾の特徴である、勾玉や管玉を髪飾りにしたり、首からかけたものもいたという。他の民族もいたようだ。

このたいへん栄えたという賀洛国に、私の想像力が楽しく働く。様々な民族がいて、そこには高度な農耕技術、建築土木技術、養蚕と絹織り物の技術、酒造技術、雅楽、宗教（仏教、キリスト教など）、大陸の殖産工芸も導入されていた国だとしたら、そこはもはや唐のり

トル長安のような姿を呈していたのではないのだろうか。これは少し飛躍だろうか。だとしても、頭の中で組み立てる小説は誰にも迷惑をかけない。私はこれをもう少し楽しみたい。これら国家建設と発展に必要な技術群を、この時代、金海の地にもたらしたのは、いったい、誰だろう。それは中国大陸伝来だろうというだろう。しかし、それだけだろうか。天文学にしろ、軍事に関することにせよ、重要な案件は今も昔も、国家機密として門外不出のはずである。これらの知識なりを許可なく外国に持ち出そうとすれば、国際的紛争になっただけである。

では、賀洛国にこれらの国家機密にも匹敵するようなハイテクな技術をもたらしたのは誰か？

想像は翼を付けてさらに飛躍する。ユダヤ民族が運んできたとしたらどうだろう。約三千年前、ユダヤ民族はエジプトを脱出して、世界に散ったと言われている。彼らは前述した高度な技術群を持ち合わせていた。私はかつて読んだ、坂東誠著『秦氏の謎とユダヤ人渡来伝説』の中で、ユダヤ民族の優越性を知って驚いた。彼らは長きにわたり、行く所々での迫害を逃れて、大移動を繰り返した。その過程でシルクロードを拓き、ユーラシア大陸を経て中国に入った。そこで唐朝の庇護を得て、キリスト教（景教）を広め、栄えた。しかし、王朝の権力の変化に伴い、彼等はまたもや迫害を受けるようになる。

再び民族移動を余儀なくされる。一部は東南アジアに散り、また一部はさらに東を目指したというなら、朝鮮半島の南部に、落ち着いた彼らの支族がいたかもしれない。前述したように、この地には、中国式あるいは日本式の服装や、装飾をしない民族もいたということは、これを物語るのではないか。二百年以上の歳月は、更なる混血の人口を増やし、金海の地に深く根を張ったことだろう。

ユダヤの支族の頭脳明晰なトップたちは、国際的、対外的な経験を積んだことだろう。彼らは、百済や新羅の政治の中枢に、深く入り込んだだろうことは想像に難くない。そして日本も。五世紀前後（応神天皇の頃）、百済からの渡来人として彼らを、十万人以上を帰化人として受け入れている。

さて、想像の翼を萎めて、金海の地に戻ろう。私は賀洛国を検索しながら、地図を開き金海の地を探す。古代のロマンを秘めた金海。地図のそこだけは青々とした穀倉地帯が広がっている。現在の金海平野だ。洛東江の下流に当たる。流れは日本海へと注がれるのだが、金海の地は大陸へ深く入り込んでいる。釜山から距離にして約十キロ以上は大陸に入り込んでいるのではないだろうか。

司馬氏がこの金海を流れる洛東江の畔に立った時、入り江ではなく湖の畔にしか理解で

きなかったという。彼の眼前に広がる風景は、入り江のはるか向こうに陸があり、漣一つ立てない静かな水面などは、入り江らしくなかったらしい。池のふちを歩いているようだと云っている。何よりも、日本海に続く入り江にしては、その水路は迷路のように入り組んでいて、奥まり過ぎているというのである。それゆえ、彼はそこを神秘とロマンを秘めた、古代の二国を結ぶ、隠れ入り江と呼んだ。

冬のよく晴れた日、さほど大きくない船にでも乗って、釣り糸を下げていた男がいたとする。魚は釣れない、日差しは暖かい。転寝をむさぼっているうちに、船は洛東江の入り江を大きく離れてしまう。男は眠りから覚め、日本海に漂っている自分を発見する。さあ、どうする！ 風はどんどん、男を日本へと運ぶ、やがて、遠霞に自分の国ではない、日本の陸地が見える。その時の男の心境はいかに。心を掻き立てたのは、冒険心とロマンか。はたまた、恐怖心だろうか。

さて、洛東江の畔に佇む、ロマンチストの司馬さんをそこに置いて、私は、司馬氏が……朝鮮人はどこからきたのだろうか……というくだりに飛んでみたいと思う。

司馬さんは、朝鮮民族は、常識で考えられるのは南下者であろうと、書いておられる。つまり、北方の、今は満州という地名がないから、「東北」と呼ばれる場所らしい。西は沿海州、東はロシアの向こうまで、ユーラシア大陸の北部の方を、東西に走り回っていた騎馬民族に、端を発するという。ウラル・アルタイ語族から見ると、モンゴル語、朝鮮語、日本語は、姉妹、あるいは親戚関係にあるという。これから先は、私自身、さらに学ぶということ、自国の歴史の扉に手を掛けなければならないと思う。